何とも言はれなかつた。これ以外に、他に何處にさうした溫泉があるであらうかと私には思はれた。私は浴舍の二階の欄干に凭つて、茫と薄月に照された野を眺めたことを忘れることが出來なかつた。

この他にも、仙臺地方には溫泉が澤山あつた。それを數へて見ると、笹谷道にも、川崎から少し南に入つたところに、名は忘れたが、何とか言ふ溫泉があつた。それから名取川の上流、赤石川と北川との會合點から少し溯のたところに秋保溫泉があつた。これも好い溫泉場で、仙臺から人の大勢出かけて行くものゝ一つであつた。たしか、幹線の增田驛から、軌道がそつちへとわかれて入つて行つてゐたと覺えてゐるが、今もあるか、何うかな。

この谷と谷をひとつ北に隔てゝ、あの仙臺市の南部に落ちて流れて行つてゐる廣瀨川の溪谷が長く東西にひらけて行つてゐた。そしてそれに添つて、往昔の關山道——山形地方に入つて行く最も交通の盛であつた道が一條長く通して行つてゐた。そこに作並溫泉があつた。まだその谷の一支脈を深く北に山の中に入つて行くと、定義といふ溫泉があつた。紅葉の時などには、非常に

好いといふことであつたが、私はまたそこまで入つて行つて見たことがなかつた。

二十六

仙臺附近では、松島の勝が先づ誰の口にでも上つた。松島！　一生の中に一度はそこに行つて見たいと言はないものはなかつた。

日本三景の中では、こゝが一番落ちるなどといふ人があるけれども――それは唯一部を見ただけの言葉で、本當に見れば、一番落ちるどころが、一番すぐれてゐはしないかと思はれるくらゐであつた。『衆美歸松洲、天下無山水』かう南山和尚が言つてゐるが、實際さうだ……。富山あたりから見たあの大きさは？　あの複雜した形は？否、更に日本の脊梁山脈を背景にした眺めは？

あそこにのぼると、最早松島の松島ではなしに、日本の松島といふ氣がした。(新富山や總觀山では、その脊梁山脈をも松島の背景として見ることは出來なかつた）いかにも規模が大きかつた。笠松から見た橋立の眺望は、それは瀟洒とは言ふことが出來たけれども、とても松島のあの大き

な感じを持つてはゐなかつた。それに、大鷹森あたりから眺めた島の感じも決してわるいといふことは出來なかつた。

鹽竈の港――これがまた特色に富んでゐた。こゝから出て行く汽船には、三陸の海岸を定期航路にしてゐるものがあるので、旅客が常に多く集つて來た。金華山にも、一鮎川までの汽船が毎日二回航行した。

普通では金華山まで入つて行くものは滅多にないが――ことに女子供にはむづかしい航路だが、しかし一度行つたものに取つては忘れることの出來ないものであつた。その汽船の甲板の上からは、松島――ことに裏松島をぐるりとはつきり見て行くことが出來た。

松島や
雄島の松の
ひきをあらみ
かぎろひやすし

冬の日影は

これは冬の寒い頃に行つて詠んたものであつたが、その島の、松の生えた島の白ちやけた基磐に夕日のさびしくさしわたつてゐるさまは、何とも言はれない感じを私に與へた。それにその時分の海の碧さ！　その上に浮んだ帆の白さ！

『金華山は、女には駄目ですか？』

かうある女が訊いた。

『さうさな……ちと海があらすぎるな。汽船が毬か何かのやうになることがよくするんだから……。それに、あの山雉の渡があるからな？』

『そんなにひどいのですか？』

『夏の靜かな日か何かに、その時分には、汽船が金華山のあの華表のところまで行くから、その時を選んで行けばさう大してひどいこともないだらうけども、何しろ、あの山雉の渡をわたるんぢや大變だ――』

『女は行つてゐませんか？』

『さうさな……。大抵は男だな。それは田舍の女なんかは行つてゐないこともないけども、都會の女には、ちよつとむづかしいな……。何しろ、ひどい、波の高い中を小さな舟で、船頭が五六人も櫓を押して、曳々聲を立てゝやつと漕いで行くんだからね。男でも起き返つてはゐられないくらゐだからね？』

『さういふ、女の行けないやうなところだときくと、猶は行つて見たくなるのね。』

かう言つて女は笑つて、『それでその渡しが何町ぐらゐ？』

『二十町つて言ふんだがね、もつともつと遠いやうな氣がするね。何しろ岸に打つける波が十丈も十五丈も高くあがるんだからね。まあ、えらいところはえらいところだよ』

『行きたいのねえ！』

『それに、行つた向うが、女にはちよつと殺風景だよ。何しろ、その島にはお宮きりないんだから。宿屋だの、店屋だのはないんだから――。何うしたつてそこに一夜泊まらなければならないんだから。それも天氣ならすぐ歸つて來られるが、しけでもしやうものなら、五日でも六日でもそこに滯在してゐなくつてはならないんだからね？』

『やつかいなところね……』

『それに、食ふもんなんて旨くはなしね。まあ、言つて見れば、お寺に行つて、おときにつくやうなもんだからね？　あまり好い氣持のするところではないよ』

『ぢや、その島の中に　別に人は住んでゐないの？』

『島の向うに燈臺があつてね、それがアメリカ航路に取つて大切な燈臺なので、そこにその方の役人とその家族とが住んでゐるがね？　それつきりだよ。あとはお宮ばかりだよ』

『その島は小さな島？』

『さうさな、あれでもかなりあるな。周圍五里ぐらゐあるよ。そこに、お宮と、燈臺と、鹿と、それだけで住んでゐるんだからね？』

『鹿は澤山ゐるの？』

『何しろ、あそこの鹿は、奈良のやうに飼つて置くんぢやないからね』
『それぢや、ひとり手にゐるのね？　それでゐてあぶなくない？　人にかゝつて來やしない？』
『鹿はおとなしい動物だからね。のそつとしてゐるよ』
『澤山ゐるの？』
『今ではもう少くなつたんださうだけれども、それでも、澤山ゐるよ。島につくと、そこにも此虚にもつていふ風だよ。』
『面白いのね？　行つて見たいのね？』
『ぢや行くさ……』
『一度伴れて行つて下さいね……。怖くつたつて好いから』
『まあ、大抵、驚いて了うね。何うしてこんなところに來たらうつて思ふね。そのかはり好いことがある？』
『何ういふ？』

私は笑つて、『あそこに行くと、きつと金が出來る』
『本當？』
『本當だか、うそだか、さういふんだよ。それで皆なそんな怖い思をしても、あそこにお參りに行くんだよ。あそこで御祈禱をして貰つて來ると、きつと金が出來るんだとさ！』
『貴方は何う？』
『僕？』私はまた笑つて、『さうさな、その二三年は金が出來たやうだつたな……。その證據には、今でも、嘘なんか、此頃のやうに金がなくつても困るから、もう一度金華山に行つていらつしやいよッつて言ふからね？』
『さう？』女は長く引張るやうにして、『それは酔白いのね？　私、行かう……。お金が出來れば、それほど結構なことはないから』
『その代り、命懸けだぜ！』
『好いわ』

女はこんなことを言つて笑つた。

それは兎に角として、そこらあたりの海は、近海では見ることの出來ないものであつた。あの波の高さは？　あの潮のかをりの強さは？　此處に來て、始めて私は本當の海を見たやうな氣がした。

そして歸りは石の卷の方へと出て行くのが順路であつた。そこは北上川の河口だけあつて、港としての一種特有な感じを持つてゐた。その附近には渡の波などといふ海水浴場があつた。

で、汽車で小牛田から鳴子の方へと出て行つた。

二十七

この鳴子の方に向つて進んで行く汽車は、ちよつと感じが幹線とは違つてゐた。それと言ふのも他ではなかつた。幹線が平野の中を走つて行くのに比して、眞直に野から山――しかも脊梁山脈の高峻な山巒へと向つて駛つて行つてゐるからであつた。

そこからは栗駒岳（須川岳）がはつきりと手に取るやうに見えた。土地の人に言はせると、栗駒岳は岩手縣に籍を置いてはゐるけれども、實は全く宮城縣のものと言つても好いので、陸前平野から一番はつきりとその山の姿が指さゝれるといふことであつた。それ栗駒に雪が除つた！

それ冬が來た！　でなければ、あゝもう栗駒の雪も少くなつた！　春だ！　春だ！　かう宮城の人達はその山を指して言ふとのことであつた。私は男の兒達に指した。

『そら、栗駒が見える。あの笊森のところがすつかりわかるぢやないか……？』

『さうだね？』

二三年前に一緒に一の關からその山の上の溫泉に行つたことのある男の兒達は、めづらしさうにしてじつとそれを見詰めた。

『それぢや、あの一番高いところの陰になつてゐるんだね？　あの溫泉のあるところは？』

總領の方の男の兒が言つた。

『さうだ……。そら、笊森の裾を谷に添つて通つて行く時、向うに雪の殘つてゐるところがあつだね？　あそこだよ、あの一番高いところは？　溫泉はあれからずつと下りたぢやないか』

『さうだね』

汽車の進むにつれて、その大きな山の姿は右になつたり左になつたりした。時にはずつと離れて車窓の横にはつきりと見えたりした。やがて小牛田驛が來た。そこには東北幹線の青森行が長蛇のやうな汽車を横へてゐた。私達は急いで新庄行に乘り換へた。

北浦から古川に行くと、ひろびろとした仙臺平野は既にあとになつて、次第にその三面を山で

圍まれるやうになつて行つた。栗駒はまだ見えてゐたけれども、しかももはやさつきのやうにはつきり　其全容は示さなかつた。汽車は溪流に添つて次第に岩出山の町の方へと進んで行つた。

そこは伊達政宗がまだ仙臺に出て行かない以前にゐたところで、今日でもその城址は依然として殘つてゐた。つまりかれは始めはこの山の中の城にゐて、そして四方へと出て行つたのであつた。一汽車おくらせて下りて見ても滿更つまらないこともないであらうと思はれた。

これから池月に行くと、今まで迫つてゐた山巒が急に引込んででも了つたやうに忽ちひろびろとした高原が開けた。栗駒がまたはつきりと見え出して來た。

この附近は、好い馬の出來るところで、有名な鍛治屋澤の軍馬養成所は、そこから少し行つた街道の上にあつた。半ば高原半ば丘陵のやうなところを汽車は煤烟を漲して走つて行つた。

川渡から鳴子、この間は溫泉村八湯と言はれて、昔から名高くきこえてゐるところであつた。河原湯、新車、舊車、赤湯などといふ溫泉が、汽車のレイルの左右に點々として散在してゐた。

やがて汽車は鳴子に着いた。

これまで來る間の荒雄川は、かなりに美しい溪流であつた。それはひろびろとした川原で、石が多く、その中に線を成して流れてゐる水は、一種言ふに言はれない靜かな響を立てゐた。向うの山巒の上には晴れた日影に雲がぽかりと浮んでゐたりした。

しかし鳴子に入る前に、汽車はこの川と別れて了はなければならなかつた。鳴子の傍を流れてゐるのは、それは最早荒雄川ではなかつた。荒雄川は向山と花淵山との間からずつと奥深く流れ出して來てゐた。

鳴子は兎に角賑かな溫泉場であつた。東北地方では、或はこゝが一番大きな溫泉場であるかも知れないくらゐであつた。家屋が家屋に接した。瓦甍が瓦甍に接した。三味線の音が到るところからきこえた。

ある旅行家は話した。『何うも弱りましたよ。あんなに込んでゐやしないと思つて入つて行つたら、何處も一杯で、ゐるところもないやうな雜踏ですもの……。夏はあそこはとても駄目ですな……？』

『そんなですかな？』

『えらい目にあひましたよ。それに、えらく俗地になつた。汽車が出來るといふと、あゝもわるくなるもんですかね？』

『それは何うも爲方がないね。しかしぢきまた元にもどるよ。さういつまでもうかれてばかりはゐられないもんだからね？』

かう私は笑ひながら言つた。私は芭蕉が此處を越えて行つた時分のことを頭に描いて見た。また例の尿前の關でよんだといふ『蚤しらみ馬の尿する枕元』といふ句を思ひ出して見た。つゞいて案内者を賴んで、ひどい思ひをしてやつとその羽前と陸前との間に横つてゐる山路を越えて行つたさまを頭に描いて見た。否、そればかりではなかつた。義經もたしかにこゝを越えて平泉に入つて行つたに相違なかつた。鳴子は啼子で、義經の妾が此處で子供を生んだために、そのために出來た地名であるなどといふ傳說も滿更荒誕ではないやうにも思はれて來た。尠くとも此の道路は、北國地方から東海岸地方に入つて來る唯一の比較的樂な路であつたに相違なかつた。私は

それを今の繁華に引くらべて考へて見た。汽車は二つ三つの驛を置いて何の苦もなく新庄の方へと出て行くのであつた。

しかし此處まで入づて來た人達は、こゝで引返さずに、もう少し深く荒雄川の谿谷の中まで入つて見なければならなかつた。何故と言ふのに、そこには鬼首八湯と言つて、湯がまだ澤山に沸き出してゐるばかりではなく、その一つには、日本でも有名な間歇泉の吹上溫泉があるからであつた。

鳴子からそこまで三里ぐらゐしかなかつた。さう大して骨の折れる路でもなかつた。それに、荒雄川の谷が到るところにその潺湲を展開してゐて、思はず立留つて眺めるやうなところが二三箇所はあつた。段々山も深くなつて、嵐氣が絶えず搖曳した。

吹上の間歇泉は、大小二つの穴があつて、一つ止めば、一つ吹き出すといふやうに、頗ぶるめづらしい噴騰を見せてゐたが、十年前から、ひとつの穴の方が出なくなつたため、その奇觀は止んださうであるが、それでも時をきめて沸き出すさまは、熱海の間歇泉以上に面白いといふこ

とであつた。こゝから栗駒の溫泉へ登つて行く人達も年々多くなつて行くといふことであつた。

二十八

『さうさね、平泉附近には、温泉はあまりないね。前に書いた酢川岳の温泉ぐらゐなもんだね？』

『しかし見るところは、あそこいらに隨分ありますね？』

『それはある……。まア第一に平泉、あそこの古跡は細かく見れば見るほど面白いからね。毛越寺のあとなどは殊に感慨が深いね』

『それに、あそこにある五串溪がちよつと好いぢやありませんか？』

『さうだね。少し、、、まだけれども、岩石と深潭の形は面白いね。それに、あそこは花の時分が好いよ』

『あそこから、須川岳におのぼりになつたんですね？』

『さう……』

『何里あります？』
『さ、人に出つて八里とも十里とも言ふが、まア八里ぐらひなもんかね。何しろ、あそこはひどい？　丸で路もないやうなところを行くんだから――』
『ぢや、まア、その山上の溫泉までは何うしても一日かゝりですな？』
『さうだね。十分一日はかゝるね。僕は正午少しすぎくらゐには何うしても行くつもりで計畫して行つたんだが、四時までかゝつたからね？』
『溫泉は好いですか？』
『好いには好いね。量も多いね。いかにも山の上の溫泉といふ氣がするね。あゝいふところに行つて、一夏、原始的の生活をするのも好いね？　それに、山が好いよ。流石は脊梁山脈だといふ感じがするよ。設備？　設備はあまり好くはない。それに、あゝいふ山の上だから、物價だつて、さう安くはないかね？』
『一度行つて見るかな……？　それから、何とかいふ好いところがありますね？』

『溫泉？』
『いや、溪流で、そら、何とか言つた……？』
『猊鼻溪？』
『さう、さう……猊鼻溪、そこは好いんですか？』
『ちよつと不思議な感じのするところだね。一度は行つて見ても好いところだと思ふね……。』
『一の關から餘程ありますか？』
『さう四里半つて言ふんだが、五里ぐらゐあるといふ氣がしたね。何しろ車も馬車もないといふやうなところだからね。それに、暑い山の中でね？』
『それぢや、ちよつと樂に行つて來るといふわけには行きませんね。狐禪寺の方に行くんですか？』
『さう――つまり東海岸の高田の方へ出て行く街道だね。長阪つていふ村のすぐ傍にあるんだよ……。何しろ、あそこいらは、三十年も四十年も後れてゐますからね。今でもまだランプかも

知れないよ。夜は眞暗になつて了ふんだからね？』

『耶馬溪に似てるッていふが、さうですか？』

『丸で違ふね。紀州の瀞八町の山の淺いのだね？　しかし、岩石には立派なのがある？　さうさな、かういふ氣がしたね。こんな平凡なところにこんなめづらしい溪があるのかなア！　夢のやうだな。かういふ氣がしたね？　お伽話の中にでもありさうなところだよ』

『九串溪とはそれでは大分違ひますね？』

『あれとは丸で種類が違ふ？』

『それから、ずつと盛岡の方へ行く間に温泉がありますか？』

『何でもあの間に、花巻驛あたりから西に電車の便があつて、志戸平、大澤、鉛、この三つの温泉が豐澤川といふ溪谷に添つて散在してゐるさうだが――何でも、そこは大分旅客が下りて一夜泊つて行くといふ話だが、僕はまだ一度も行つて見たことがない……』

『花巻ですね？』

『さう――あつちの人の話では、此頃は設備も中々よくなつて、志戸平などは、都會人が行つても、不愉快な思ひをするやうなことはないといふことだがね？　それに、鉛温泉あたりは、山も深く、感じも好いつていふことだけども、行つたことがないんだからね。』

『それから此頃、盛岡の近所に、一里半ほどのところに、何とかいふ温泉が出來たつていふぢやありませんか？』

『新盛岡温泉？』

『さう、さう、そんな名だつた？』

『あれは岩手山の網張温泉が引いて來るんだがね？　かなり遠いから、冬なんか湯が温くなつちやつて駄目だらうと思ふがね？』

『そんなに遠くから引いて來るんですか？』

『何でも五里ぐらゐはあると思ふな。あのずつと西に寄つた方だから。今は盛岡から橋場輕便線といふのが出來て、雫石までは行つてゐるが、あれから溪を二三里、もつとのぼつて行つた、丁

度岩手山の裏手に當つてゐるところになつてゐるんだからね。それも、あの網張が湯の元ぢやないんだ。湯の元は、もつと上の、五六千尺も上の大釋にあるのだ。それを大きな鐵管で下して、そして網張温泉といふものが出來てゐる、そこから孫引にまた引いて來た湯だからね？』

『そんなに先きの湯なんですか。それでも、その網張つていふ温泉は面白いさうですな？』

『あそこはちよつと面白い。隨分山の中で、岩手山にでも登つたものでなければ滅多には行かないけどもね。それに、あそこには葛根田川に岩窟があつてね。ちよつと奇景をつくつてゐるよ。一度は行つて見ても好いところだね？』

『それから、岩手山の東の裾のところを通つて、毛馬内から小阪の方へ出て行く路があるつていふぢやありませんか。あの路は面白さうですね？』

『さうだね。僕もあそこを通つて見たいと思つてゐるんだけども、まだ通つて見たことがないんだ――』

『温泉などもかなりにあるつていふことですね？』

『さうだらう。澤山あるだらう。何しろ、あそこいらには、山の中に埋れ盡してゐるやうな温泉の澤山にあるところだから』

『幹線の右には、あまりないやうですね？　温泉は？』

『東海岸へ行く方かえ？』

『さう――』

『探せば、あるかも知れんけども、ちよつときかんね。何しろ、あそこいらは、日本でも一番ひらけないところだからね。人口の密度から言つても、一番少ないところだからね？』

『さうでせうな？　あそこいらは？』

『汽車で通つて見ただけでもわかるよ。盛岡から野邊地までの間が、一番暗い感じを起させるところだからね。本當に昔の蝦夷地にでも入つて來たやうな氣を起させるからね……。さびしいところだね？』

『本當ですな』

『好摩、沼宮内、福岡、あそこいら皆暗くさびしい……』
『あなたは三戸から十和田湖にお出でになつたことがありますか？』
『いや――』
『あそこはよう御座んすぜ！　今では自動車も行くから、わけはないでせう？　三本木から蔦温泉まで一氣に行くことが出來るでせう？』
『さうかね。そんなに便利になつたかね。それは特別の成金だけぢやないかね。いつでもさうかね？　三本木で下りると、自動車どころぢやない。車もないつていふやうなわけぢやないかね？』
『そんなことはないと思ひますがね？　しかしあてにはなりませんね？』
『あそこは好いつてね？』
『奥入瀬川が好う御座んすね。あんな川はちよつとない。東北でも屈指の溪谷だと思ひますな？』
『溪が好いのかね？　それとも岩石が好いのかね？』
『何方も好いですな。瀧なんかも大きいのがありますよ』

『山は深いかね？』
『深いことも深いですね。密林もかなりに長くつゞいてゐますから……。』
『一度行つて見たいな』
『是非いらつしやい？　それで十和田は御存じなんですか？』
『いや、あそこには、てんから入つにことはないんだ――』
『それは惜しいことだ。あそこの周圍には溫泉だつて、かなりにありますよ。弘前の方から行つても、板湯、溫湯なんて言ふのがありますしね？……それから、鮫港の方は？』
『あそこは知つてゐる』
『あそこも好いところですね。ちよつと東北といふやうな氣のしないところでさね。あそこまで來ると、盛岡以北の暗い感じがすつかりなくなつたやうな氣がしますね』
『さうだね？』

二十九

私が長い間あくがれてゐながら、今だに行つて見ることの出來ないのは、野邊地からずつと長く出てゐる下北半島の地であつた。私はそこを通る度に、何遍あの恐山の微かな影を仰いで、遙かにそれに憧憬したであらうが、低くはあるけれども、あの形の正しい恐山！　そこから線香のやうに靄いてゐる細い噴烟！　ことに、弦のやうに彎形を描いてさびしく横つてゐる長い長い沙濱！『家遠しみそはきつむはみなし子か』といふ句を露伴が口吟んだそのさびしい玖環の唉いてゐる濱邊の路！　ぼくぼく馬に乘つてそして一日かゝりで辛うじて行き着いた路！　しかし今はもうさういふことをしたくも出來なくなつた。今はそこには汽車が出來た。田名部、大湊まで汽車が出來た。

私に舊式な汽車がガタガタとそのさびしい海岸を動搖しながら通つて行くさまを想像した。ま

たところどころに、さびしい堀立小屋のやうな停車場の立てられてあるさまを想像した。そしてそこから二三人の田舍の乘客が改札に切符を切つて貰つて乘つて行くさまを想像した。何とも言へない氣がした。今にも飛び出して行つて見たいやうな氣がした。

それに、私に取つて一番思を誘はれてゐるのは、その途中の、田名部と野邊地との眞中あたりに、横濱といふところがあつて、そこに石田三成のあとがかくれてゐたといふことであつた。實際當時にあつては、その石田の遺族は何處にもゐることが出來なかつたに相違なかつた。天にかくれ地に潛んでも、その所在を探し出されたに相違なかつた。私はかうしたところに來て、始めて落附くことの出來たかれ等を想像せずには居られなかつた。

『それはしかし本當かね？』

かうある人が訊いた。

『本當ださうだ……。成ほどあそこいらにかくれたらうといふ痕跡があるさうだ……。日本でも、あそこだけださうだからね？　石田のあとの殘つてゐるといふところは？』

『子供かね？』

『それは何だかわからない。何でも家來ぢやないさうだ。子とか甥とか血統を引いたものには違ひないさうだが――いくらか古いものも殘つてゐたさうだが、知れると何んな目に逢ふかわからないので、わざと破つたり壞したりして了つたらしいね？』

『ふむ――』

その人も打たれたといふやうにして頭を振つた。

私はそこから歸つて來た友達に訊いたり何かした。さびしい村ださうだ。丸で北海道の奥にでも行かなければ見られないやうなさびしい低い家屋のほつほつ連つた村ださうだ。友達は言つた。

『實際、さうだとすると、ロマンチックだね。大反逆者の遺族が何百年間默つて、あの暗い海に面して生きてゐたかと思ふと、變な、不思議な氣がせずには居られないね！』

『本當だ』

それから話は、維新の時に會津藩がこの半島に移されて來た話になつた。そこには今でもその

あとである人達が澤山に殘つてゐるといふことであつた。

それに、恐山といふ山が何うしてさういふはつきりした聯想を私に起させたかと言ふと、それは母親の口から絶えずその山のことが語られたからであつた。母親の話では、その南部の恐山に行けば、誰でも死んだものに逢へるといふことであつた。幼くして父に別れた私は、『父さんにも一度何處かで逢へたら？　南部の恐山に行けば、それはきつと逢へるつていふでな。一度は行つて見たいな！』かうした母親の言葉をよく耳にした。何でも、そこには地獄と極樂とがあつて、地獄の釜の沸え立つ音もはつきりきこえるといふことであつた。また、死んだ人達は、何處からともなく、フワリとあらはれて來るといふことであつた。そしてその横顔を、または正面を、後姿を見たものは澤山にあるが、此方から話しかけると、その姿は掻消すやうに見えなくなつて了ふといふことであつた。幼ない私は不思議に思つた。その恐山をはつきりと夢に見たことなどもあつた。

友達の話では、半島の中心である田名部町から、そこまではいくらもないが、行つて見たところで、善男善女が大勢來てゐるばかりで、大して面白いところとも思へないといふことであつた。單に、山として考へて見ても、平凡で、大したものではないらしかつた。

『溫泉があるやうだね？』

『恐山に……？　さうさうある、ある。汚ないひどい溫泉がある。とてもあんなところには入れない……』

友達はかう言つたが、『溫泉といへば、あそこに、あの半島に好い溫泉があるよ……。さう、陸奥灣の方でなしに、津輕海峽の方に向いてゐるんだがね？』

『尻矢崎の方かね？』

『いや、あれより此方だがね。あんなところにあんな賑やかな好い溫泉場があるかと思はれるくらゐだよ。』

『何つていふんだね？』

『下風呂溫泉――』

『へえ、さうかね？　そんな溫泉があるかね？　田名部町から餘程あるのかね？』
『何アにいくらもありやしないよ、ぢき行けるよ。で、何うして、あゝいふ溫泉があそこにあるか？　僕は考へたがね？　暫くしてやつとわかつた。つまり、その溫泉はそこらの田舍の客を目的にしてゐるんぢやないんだね。向う側のお客さまを相手にしてるんだね？』
『向う側つて？』
『北海道さ……』
『へえ！』流石に私も聲を擧げずにはゐられなかつた。
『段々見てゐると、皆なお客がそこいらの田舍の人ぢやないんだ。皆な都會風の客なんだ。女の風俗だつて、皆なさうなんだからね。不思議にしてゐたがね？　毎日小さな汽船が函館からそこにやつて來るんだよ。それで、やつとわかつたね……。不思議なもんさ！』
『ふむ、それは面白い』
『つまり、下北半島でも、あそこいらはすつかり北海道の感化を受けて了つてゐるんだね？　下

風呂ばかりぢやない、外もさうだよ』
『面白いもんだな？　それで、宿屋なども大きいんだね？』
『少くとも、淺蟲ぐらゐの設備はあると言つて好いだらうな……ちよつと豫想外な氣がするよ』
私はその海添ひの溫泉場――層々相連つた浴樓が、碧い海を前に、遙かに北海道の碧い山巒を望んでゐるさまをはつきりと眼の前に描いて見ずにはゐられなかつた。またペンキ塗の小さな汽船が午後にそこに來て、客を艀に下したり乘せたりしてゐるさまを描かずにはゐられなかつた。

三十

野邊地を出た汽車は、さびしい暗い感じのする陸奥灣に添つて、次第に小湊の方へと進んで行つた。

そこには赤松があつたり、波の寄せてゐる磯邊があつたりした。何でもその松林の附近に、馬門鑛泉といふわかし湯がある筈であるが、私は一度も下りて見たことはなかつた。

小湊から淺虫へ。美しい海はやがて見え出して來た。それに、此處の海の特色として忘れ難いのは、その碧が何處か影を帶びてゐるやうなところがあることであつた。何となくあたりが暗くさびしく感じられた。それは何故かといふに、一方にあの深い高い八甲田山の翠微を帶ひてゐるためであつた。海中には大きな島が浮んでゐた。

此處から眺めた下北半島は、何とも言へず見事であつた。

この淺虫は、汽車の線路に當つてゐるので――本土から北海道に渡つて行く旅客の往々下車して一泊して行くところなので、田舎の溫泉としては、寧ろ過ぎたくらゐの設備をしてゐるのを私は見た。旅舍などには大きな二階三階があつた。

それに、こゝの溫泉はかなり昔から知られてゐるらしかつた。青森がまだ全くの荒磯であつた時分、旅客が北海道にわたるためには、あの長い外ケ濱の道を通つて、三厩まで行かなければならなかつた時分から、麻蒸の湯として、ある程度まで世間に知られてゐたらしかつた。そこでは里人がよく麻をその湯の中に浸した。

『ぢや、青森の港は昔からあつたんぢやないんですか？』

その話をすると、かう驚いたやうにしてその人は言つた。

『あれは、ごく新しいんです。たしか、明治の初年でせう？　あそこが港に開かれたのは？』

『そんなに新しいんですか？』

『漁村らしいものはあつたかも知れませんが、あゝいふ風にひらけたのは、明治になつてからですよ』

『それぢや淺虫などでも、青森が開けたために、あゝ大きくなつたつていふ形はありますね？』

『それはさうですとも――』

『ぢや、あそこも、松本市の淺間、松山市の道後のやうに、青森市の淺虫つていふ形があります ね？』

『いくらかありませうね、さういふ形ち？　何しろ、弘前市の人になると、もう淺虫ではなしに、大抵は大鰐に行きますからな？　しかし、淺虫は、單に青森市の溫泉以上に、汽車から下りて來る旅客がかなり多いでせうからな。勿論、それは急ぐ人は、あんなところに寄つてぐずぐずしてはゐませんけども――青森からすぐ船に乘つて了ひますけども、中にはゆつくり落付いて、青森のやうなあんな喧しいところに泊らずに、淺蟲まで行かうなんて言ふものもありますからな』

しかし、そこは長くゐられるところではなかつた。何しろ、土地が狹く、猫の額のやうなところなので、ぢき飽きて了つた。海岸に出て見たところで、舟で島に遊びに行つて見たところで、

要するに、それだけのもので、始めはちよつと面白いやうに思はれても、ぢき飽きて了つた。弘前にゐる私の弟は言つた。『あそこに一月ゐたがね、飽きた、飽きた！　何しろ、あれだけのところだから、何うすることも出來ない。爲力がないから、毎日、舟で魚釣に行つたけれど、しまひには、それにさへ飽きて了つてね？』

『魚は釣れるかね？』

『釣れるには釣れる。黒鯛なんかいくらでも釣れるね。かれひなんかも釣れたよ』

『それは面白いな』

『なアに、もう、あきちやつてね。後に嚊を呼んだり子供を呼んだりする始末さ！』

『あそこいら高いかね？』

『宿賃？　何アに、あたり前にしてゐりやそんなに高くありやしないよ。餘り威張りたがるから高く取られるんだよ。僕等が行つてゐた時分には、また物價のさう高くならない頃だつたが……今だつて三圓ぐらゐでゐられるだらう？』

『そんなに安くゐられるからね？』

『なアに、青森が近いたつて、矢張田舍は田舍だよ。東京のお客ばかりを標準にしてはゐられないからな。味噌醤油のお客さんだつて、矢張歡迎しなければならんからな』

『それはさうだらうな？』

『東京のものは、東京を振り廻すから駄目なんだよ。おとなしくしてゐりや好いんだ！　第一、茶代なんかを無闇に出しすぎるんだよ』

『さうかなア、僕はあべこべに思ふがな、宿屋では、東京人だと見ると、茶代が欲しくなるつていふやうに思はれるけれどな？』

『それはさういふ形もあるかも知れないけども、そんなこと頓着せんのさ！　無理によこせとは言ひはしなからうな』

弟は軍人だけに、ぶつきら棒に言つた。私は默つて了つた。茶代の問題は厄介だなアと思つた。

三十一

青森から先にも見たいところは澤山にあつた。第一に、あの長い外ヶ濱を辿つて見たかつた。昔は瑪瑙が落ちてゐたといふ母衣月の海岸あたりにも行つて見たかつた。否、向うに海を隔て、松前の山影を微かに見るといふ昔の三厩の港にも一夜泊つて見たかつた。昔は、松前に渡 うとするものは、皆なそこまで行つて、二日も三日も風を見て、そして小舟でわたつて行つたのであつた。それに、そこまで行く山の中には、地方にきこえた大きな國有林があつて、扁柏の緑の美とさは言語にも絶するほどであるといふことであつた。

三厩から十三潟の方へ出て行く路もかなりに面白いものらしかつた。小さな峠があるが、それは殆ど意にするに足りないものであつた。さびしいさびしい十三潟の錆びた碧！　そこを小舟でわたつて行つた時には、何とも言はれない氣がしたと友達は話した。

『それから、君は龍飛岬まで行つたかね？』

かう私は訊いて見た。

『行つたとも――あそこは好い。あんな大きな　美しい岬と海とを見たことはない――』

『さうだつてね？　好いつてね。誰かも言つてゐたよ。伊豆の石廊岬あたりと比べて何うだね？』

『さア、あそこよりもひろびろとしてゐるね。あゝした徒崖は龍飛にはないけども――』

『それから、君は何う行つたね？』

『あれから、ずつと下つて、鯵ヶ澤から、深澤、それから峠を越して能代へ出て行つたよ』

『あ、あつちへ行つたのか？　それは面白かつたらうな？　あそこに大戸瀬といふところがあるね？　好いところかね？』

『鯵ヶ澤と深澤との間だらう？　ちよつとあそこに好いところがある。岩がめづらしいな　……しかし、さう大してすぐれたといふほどでもない。それよりも深浦から峠を越すと、向うに寒風山が八郎潟を控えて聳えてゐるのがはつきりと手に取るやうに見えたが、あれは何とも言はれな

かつた！』

『あの峠はそんなにひどくはないかね？』

『ちつともひどくはない。車も通さうと思へば通るよ』

『面白いな、あの路は――？　僕も是非一度通つて見たいと思つてゐる』

青森から大釋迦を越して、弘前の方へと出て行く路――つまり汽車の通つてゐるところには、例の岩木山の美しい姿が繪のやうに旅客の目に映つた。その岩木山の半腹にも、嶽といふ溫泉はあるけれども――夏はかなりに雜踏する溫泉であるけれども、そこは客種がわるいので、中流の人達は、大抵平川の流に添つた大鰐の方へと出かけて行つた。

そこは山の中といふほどではなかつたけれど、ちよつと風氣が濃やかで、昔は奥州の高野山と言はれたほど流行つた大きな寺が城壁のやうな形をした山の上にあつたりして、一夜旅客の泊つて行くのには最も適したところであつた。設備は田舍のこととて、大したことは出來なかつたけれども、それでも落附いて湯に入つて行くには十分であつた。この先の碇ヶ關にも溫泉があつた。

三十二

『男鹿は君は知つてゐるかえ？』

かう友達から訊かれて、

『いや、知つてゐるつていふほど知つてゐない……？』

『でも、行つたことはあるにはあるんだらう？』

『實を言へば、戸賀あたりまでしか行つてゐないんだ！』

『あそこから引返したの？』

『いや――生憎雨に降られちやつてね。それも大抵なら、行くんだけども、えらい雨でね？　三日も四日も晴れ間がないつていふやうな雨でね？』

『何月頃？』

『わざわざ、その時分が好いつていふんで、五月の末を覘つて行つたんだけどもね。雨で、船を出すどころぢやないんだ。陸だつて、ぐしよぬれにならなけりや歩けないんだ……。爲方がないから、船川に二夜泊つて歸つて來て了つた！』

『惜しかつたねえ！』

友達はかう言つて、しばし間を置いて、『何しろ、あそこはちよつと厄介だね。一度は小舟に乗つて鳥雀窟あたりまで行つて見なけりやならないし、一度はぐるりと陸を廻つて見る……それも、本山、眞山、それから寒風山にのぼつて見なければ、本當に男鹿を見たつていふわけには行かないからね？』

『さうだつてね』

『海の岩窟も立派だね。ちよつと、あれほど見事な岩や石や窟のあるところはあるまいね？ 唯、舟が厄介だね。餘程好い天氣でないと危ないし、それに不愉快だからね。それや、陸から行つても、その一部は見えるがね？ 本當は、矢張舟でなくつては駄目だからね？』

『本山と眞山とでは、何方が眺望が好いね？』

『おもに、人の登るのは眞山だが、あそこから見ると、羽後の西海岸から鳥海が一目に見えて、何とも言へないね。賴三樹が『松洲印覺屬妖嬈』と言つてゐるが、實際、あそこから見ると、さういふ氣がしたかも知れないよ』

『たとへて見れば、何ういふ風だね？』

『さうだね？ 南と北と西と三面が皆な見えるんだからね？ それに、八郎潟も見える？ あそこにゐると、大きな海の鏡の中にでも立つてゐるやうな氣がするね？ それから寒風山にも是非のぼつて見なけりやならないよ。あそこから見た八郎潟と能代の方の海がまた別な趣を持つてゐるからね？』

『それから何でも戸賀から、くるりと廻つて來たところに、溫泉があるね？』

『湯元……』

『何でもさびしい溫泉だつていふぢやないか。その近所に、蘇武のゐたところだといふ傳說のあ

る古跡などがあつて――』

『さうだね、ちよつと感じの好い湯だね？　あそこは？』

『大きな浮槽があるつていふぢやないか。何でも『千山萬水』の著者が秋のさびしい頃にそこに行つて、ひとりでその大きな浴槽に浸つて、しみ〳〵男鹿の秋を味つたといふ風に書いてゐるがね？』

『さうだね。さびしいつていへば、さびしい感じのする湯だね？』

『何でも、『千山萬水』の著者は、能代の方から入つて行つたやうだね。あそこから、馬を頼んで、寫眞器などをのせて、自分もその上に乘つて、ぽくぽくあの長い砂濱を乘つて行つたやうだね……。ちよつと感じが好いね……』

『あゝあつちから來るのも好いね。さうすれば、八郎潟も十分に味つて來られるからね』

私の眼の前にはいろいろなものが映つた。あの八郎潟の出口にかゝつてゐる八龍橋の長い長い橋も見えれば、あの船越のさびしい漁村も、小ぢんまりした船川の港も、何も彼も見えた。海に

面した旅舍の欄干に雨がわびしく降り頻つてゐるさまも見えた。

394
232

終